The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ポカホンタス伝説としての山田長政物語 ： 明治の小説から大映の映画まで
Author(s)	橋本, 順光
Citation	タイ国日本研究国際シンポジウム論文報告書. 2015, 2014, p. 157-175
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90016
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ポカホンタス伝説としての山田長政物語
ー明治の小説から大映の映画までー
A Japanised Pocahontas Narrative：
Yamada Nagamasa in a Travelogue, Novel and Movie

橋本順光
大阪大学大学院文学研究科比較文学専修准教授

要旨

山田長政という海賊が、タイに渡って王妃をめとり「王」にまでなったとは、まるで『アラビアンナイト』の物語のようだと、英国の日本学者チェンバレンは『日本事物誌』(1891)の「船舶」の項目で記した。たしかに海国日本や南進論を宣伝する格好の人物として、山田長政は明治時代に重宝されるが、その発端は大鳥圭介の『暹羅紀行』(1875)とそれに啓発されたと思しいアーネスト・サトウの論文(1885)から始まる。明治日本の公的使節として初めてタイを訪問した大鳥は、ボウリングの『タイ王国志』(1857)などを参照して、初めて長政をタイ史の人物と同定し、サトウは多くの資料にあたって、それを修正した。さらに長政の事績が不明なところが多いことも手伝って、英国人でありながらサラワクの王となり、それゆえ現代英国の長政ともいわれたジェイムズ・ブルックと、17 世紀のポカホンタスの紹介とが、長政の物語化に拍車をかける。こうして山田長政物語は、日本では稀な異人種間ロマンスとして、いわば和製ポカホンタス物語として流通することとなった。これらの要素を集大成したのが、角田喜久雄の『山田長政』(1941)であり、実質、それにもとづく映画『王者の剣　山田長政』(1959)である。この映画のなかで、毒入りの酒と知りつつ、長政がそれを運命として飲み干す場面は、ブルックをモデルにしたジョゼフ・コンラッドの小説『ロード・ジム』(1900)で、理不尽な理由で殺されると知りつつ、現地へ向かうジムの最後と共通している。ここにおいて長政物語は、コロ

ニアル・ファンタジーとしての周期を終え、異人種間ロマンスとしての要素は希薄となり、以降は日タイ親善のシンボルとして語りなおされることになってゆく。

キーワード：オリエンタリズム、ジョゼフ・コンラッド、『ロード・ジム』、ジェイムズ・ブルック

1. 序

山田長政は、日タイ交流史研究のなかで必ずといって言及される存在だが、その受容となると意外と研究は少ない。土屋了子の論考 (2003)が現在、もっとも資料を網羅した詳論であり、例外的に英語圏ではParish(1959)の論文があるが、南進論に利用されたことを正しく指摘しつつも、それらをポカホンタス神話のような広義の植民地主義の物語（コロニアル・ファンタジー）として位置づける視点は両者ともに残念ながら十分ではない。近年、日本文学の研究者から、例えばメータセート(2010)や久保田裕子(2010)などにより、日本の文脈に即したタイ表象の研究が続き、山田長政の表象もその成果をふまえて再構成する機運が生まれつつある。そこで本稿は、これらの研究にもとづき、山田長政の事績を考証するのではなく、長政をめぐる言説が、タイの王族との結婚、内紛による毒殺、遺志を受け継ぐ息子、といった史実としては不確定にもかかわらずほぼ同じ話形が繰り返されている点で、コロニアル・ファンタジーの物語ととらえ、その話形を比較考察したい。その際には、従来のように日タイ関係だけではなく、とりわけ英国の植民地主義の物語を考慮することで、それらと連動しながら長政物語が変化したことに注目する。以下、長政物語が江戸時代以来の伝承にもとづきながら、日本では数少ない異人種間ロマンスとして近代に再編され、それが戦後まで継承された過程をたどり、いわば和製ポカホンタス神話としてみなしうる可能性を指摘したい。

2. 大鳥圭介の『暹羅紀行』(1875)とアーネスト・サトウの山田長政論(1885)

明治における山田長政の再評価に際して無視できない足跡を残したのが、大

鳥圭介の『暹羅紀行』(1875)である。大鳥は、適塾にて蘭学とオランダ語を学び、中浜万次郎から英語を学ぶなど、何よりも語学の才能に秀でていた。そのため幕府側について1869年に五稜郭で降伏し、投獄されるも1872年には解放され、その後は明治政府に仕えて能吏として活躍した。『暹羅紀行』は、そんな多才な大鳥の業績のなかで看過されてきたが、これこそ1875年に日本政府の公的な使者として初めてタイに渡った際の貴重な記録であり、大鳥の経歴のなかでももっと注目されるべき重要な位置を占めている。

このタイへの使節は、政尾藤吉(1905)の回顧にしたがえば、英国大使ハリー・パークスが明治天皇に進言したからだという。明治に改元して8年、日本の近代化の遅々とした歩みにいらだち、順調に近代化を遂げているタイに学んではどうか、なぜなら「そこには色々西洋の文明が輸入されてあって、其政事家[ママ]は余程考が広い、余程開けて居る、それで段々其国で改革が行われて立派な国になって居ります、暹羅へ誰か大官をお遣わしになって視察をおさせになりますれば余程お国の御利益になるであろうと心得ます」(p.4)と提案したというのである。もっとも当然ながら『明治天皇紀』には「大鳥圭介を暹羅国に派遣して其の風土・民情を視察せしむ」としか書かれておらず(p.430)、真偽は明らかではない。ただし、欧米列強の植民地主義化が進む当時にあっては、英国にとってタイと日本は、中国という大国を別格とすれば、同じ周辺国家として等価の位置を占めていたことは確認しておく必要があるだろう。

たとえばボルネオ島でサラワク王国の王を任じられていたジェイムズ・ブルック(James Brooke)という英国人がいる。ブルックは身一つで東洋に出て「王」になった男として「白いラジャ(White Rajah)」とも呼ばれ、ジョゼフ・コンラッドの『ロード・ジム』(1900)のモデルとしても有名だが、彼は英国政府の意を受けてタイと英国の修好通商条約の締結にも関わった。そのときブルックは1845年6月27日付けの私信で「タイには艦隊で行きたいが、日本なら帆船で行くと思う。とにかく西洋の商業の力を見せつければ、両方ともその魅力ある身体をさらけだすと思うよ」(Templer, p.73)と無邪気に見通しを述べている。タイそして日本の開国は、英国の砲艦外交にかかれば容易であること、しかも

タイの方が手強いと考えられていたこと、とはいえ、両国ともたくましい男性を前にすればひれ伏すしかない女性のような存在でしかないこと。おそらく当時の平均的な英国人の抱いていたであろう本音が、ここには赤裸々に吐露されている。もっともそんな当初の思惑とは裏腹に、ブルックはタイとの条約交渉に失敗する。この私信から5年後の1850年のことだった。

英タイ通商修好条約が締結されるのは、さらに5年後の1855年である。そのとき、ジョン・ボウリング英国公使に同伴して、後に通称ボウリング条約と呼ばれる条約に立ち会ったのが、日本に赴任する前のパークスであった。日英修好通商条約が締結されたのは、それからさらに3年後の1858年である。このことだけみても、明治天皇にタイへの視察をすすめたパークスにとって、両国は英国にとって同じ地政学的関心を占めていたことが想像できよう。それは米国にとっても同じであったようだ。英国のあとを追うようにして、米国はボウリング条約の一年後、1856年に米タイ通商条約を締結しているが、その時の米国公使は、タウンゼント・ハリスである。この初代駐日米国公使は、タイで実績を積んでからその足で日本を訪問しているのである。

このように考えるなら、大鳥の使節が軍艦「フレデリッシュ」(Friedrich)号でオーストリア公使「バロン、セッファー」(Schafer)に同行したという文脈も明らかになってくるのではないだろうか。日墺修好通商航海条約が締結されたのは1869年のことだが、この日本からみてもっとも不利な不平等条約を仲介したのはパークスだった。そして同条約の批准書は、1872年にアントン・フォン・ペッツ(Anton von Petz)とのあいだで交換されたのだが、その際に東アジアを周遊した軍艦こそ、このフリードリッヒ号だったのである。日本へ寄港しタイへ向かおうとするオーストリアの軍艦に日本の公使を乗船させ、行動を共にするという一見奇異に思える行為は、修好通商航海条約の締結あってのことにほかなるまい。あるいは、もし政尾藤吉が回顧するようにタイ行をパークスが進言したとすれば、日墺修好通商航海条約の締結に貢献したパークスがなんらかの形で仲介をした可能性も考えられるのではないだろうか。

こうした状況のなか、1875年2月20日に、工部省官吏として大鳥はバンコ

クへと出発する。外交使節としては、はかばかしい成果こそ得られなかったものの、チュラーロンコーン国王に謁見されるなど、その約 50 日間の滞在は充実していたことが視察報告書の『暹羅紀行』からうかがえる[1]。政府内文書ではなく一般書として刊行されているため、外交の記録はわずかしかないものの、『暹羅紀行』は日本のタイ研究の嚆矢としてきわめて重要な位置を占めている。実際、格好のタイ案内として読まれ、大きな影響を与えたのである。たとえば政尾藤吉も、先の回顧(1905)のなかで、1898 年くらいのこととして、その頃に「妙齢な令嬢を以つて[ママ]居るような人は大鳥さんと丁度同年格好で大抵其人は大鳥氏の書物を貫って読んで居る」(pp.3-4)ため、タイは未だに瘴癘の地という先入観が強く、タイ在住の日本人男性と縁談をまとめようにも、みなはねつけられてしまったという逸話を紹介している。このようにタイの印象をも決定づけた『暹羅紀行』のもう一つの副産物こそが、山田長政の復権だった。

大鳥は、欧米で刊行されたタイ研究の書物を多く参照し、「欧米人の所訳述彼是異同」があると困難を記しつつも、要領よくタイの歴史を概説している。その際、タイで長政がまったく知られていないことに驚くことになった。そして江戸時代における代表的な長政物語といえる斉藤拙堂の『海外異伝』(1850)を誤伝も多いとしつつ参照し、欧米の書籍が記すタイ史と照合することで、「プラチョーソンタン」王の寵臣「プラ、チョオー、プラ、サア、トウアン」を長政ではないかと推定したのだった(pp.121-122)。これこそ長政の存在を欧米の資料によって裏付けようとした最初の例にほかならない。そして長政が参照したタイの資料の主要な一つが、前述のボウリング公使が、英タイ修好通商条約を締結後、そのときの滞在を記した『タイ王国志』であった。この大鳥が長政に同定した説は、その後、採用されることも物語に援用されることもなかったが、

---

[1] すでに石井米雄・吉川利治(1987)が日本人によるタイ研究の始まりとして指摘し、最近でも『タイ国情報』で吉田千之輔 (2008)がその重要性を詳述するなど、当時のタイの貴重な記録としても『暹羅紀行』は注目されている。しかし、大鳥の伝記研究でも言及は少なく、同時代の欧米列強によるタイ地域研究との比較や、大鳥を同行させたオーストリア使節による記録 Josef von Lehnert の *Um die Erde* (1878)との照合という作業はいまだなされておらず、しかるべき共同作業にもとづく注釈や復刻は急務といえよう。

ほとんど伝説に等しかった長政を、欧米の資料を利用してタイ史上の人物に同定したことは、大鳥をもってはじまること、つまり、この『暹羅紀行』をきっかけとして多くの研究と物語が書かれるようになったということは強調しておいてよいだろう。大鳥もいうように、たとえ「訛謬附会」(p.122)を免れないかもしれないが、続く考証の基礎を築いたことに変わりはない。

事実、おそらく大鳥に刺激を受けて書かれたと思われるのが、アーネスト・サトウの論文(1885)と考えられるからである。サトウが『日本アジア協会紀要』に寄稿した論文は、日本語、英語、オランダ語の史料を広く比較対照し、17世紀における日タイ関係の中で山田長政をとらえなおした画期的な論文だった。その論文でサトウは、ソンタム王の死後、官職オークヤー・セーナーピムックを与えられた日本人義勇軍の長こそ長政ではないかと推定したのである。サトウ論文の資料的価値は高く、日本語そしてタイ語にも翻訳され、その後の長政をめぐる物語は、多くこの論文とその派生物を出典としているといっても過言ではない。ただ、こうした考証を行うに際し、サトウは大鳥の『暹羅紀行』に啓発された可能性は否定できまい。実際、英国外交官としてサトウは、1862年より1882年まで日本に滞在しており、在任中に『暹羅紀行』を目にしていた可能性は高い。またこの論文は、タイに駐在総領事代理(1884－1887)として赴任した際に発表しているので、大鳥の『暹羅紀行』をその際に読んだということも考えられるだろう。これは一つの傍証にすぎないが、1886年にアメリカで刊行された日本の代表的な指導者についての書物では大鳥がその一人に挙げられ、『暹羅紀行』についても言及がある(Lanman, p.182)。東アジアの植民地化が進むなか、欧米列強が影響力を行使しようと角逐する場として日本とタイは共通していただけに、『暹羅紀行』が無視できない存在であったことは想像に難くない。

3. 英国の植民地主義との連動－ポカホンタス神話とジェイムズ・ブルックの受容－

山田長政という海賊が、タイに渡って王妃をめとり「王」になったとは、ま

るで『アラビアンナイト』の物語のようだと、日本研究の第一人者である英国のチェンバレンは、揶揄するように記した。1891年版の『日本事物誌』中の「船舶(Shipping)」の項目においてである(Chamberlain, p.379)。博覧強記の皮肉屋らしく、海国日本の宣伝にいち早く釘を刺したわけであるが、こうした長政物語の流行において、少なからぬ影響を及ぼしたのはほかならぬ英国であった。そもそもチェンバレン自体、結果としてその片棒をかつぐことになったサトウの論文を念頭においていたとも考えられよう。たしかに土屋も指摘するように、1879年より長政は歴史の教科書に登場するなど、日本での顕彰は、チェンバレンが『日本事物誌』を刊行した当時すでに進行していた。しかし、サトウの論文は、まさにその流れに棹さし、長政の物語を近代的なコロニアル・ファンタジーとして流布させるきっかけとなったのである。

たとえば、長政を主人公にした明治前期の代表的な小説といえる森貞次郎の『山田長政暹羅偉蹟』(1887)は、サトウの論文が発掘した事績と無縁ではない。この『山田長政暹羅偉蹟』はまた、長政がソンタム王の長女柳真（ルーシン）姫に恋慕されて結婚するという、これまでの長政物語から異人種間ロマンスへと大きく変化した場面がある点で、長政物語の系譜において画期をなす。チェンバレンが直接、森の小説を指して述べたのかどうかはともかく、その評言が、こうしたサトウ論文によって拍車がかかった長政物語の隆盛を、『アラビアンナイト』のようなファンタジーに過ぎないと水をさすものであることはまず間違いあるまい。

では、こうした長政がタイの女性と結婚したという言説はどこから登場したのか。これら長政物語の成立を精査した合山林太郎(2014)によると、長政はすでに江戸時代から伝説的な快男児として虚実とりまぜた物語が書かれ、すでに『山田仁左衛門渡唐録』(1794)に「我に后女をめあはせ王位を譲り」という記述がみられるという。ただ、それらを編集し、長政物語の原形を作って流布させた点では、斉藤拙堂の『海外異伝』(1850)がとりわけ重要である。それは大鳥も『暹羅紀行』で参照していることからもうかがえよう。『海外異伝』には「是に於て国王、大いに長政を賞し、妻（めと）らすに其の女（むすめ）を以てす」

とあり、森貞次郎の『山田長政暹羅偉蹟』も、こうした一節から物語をふくらませていったと考えられるからである。

とはいえ、江戸時代の長政物語においては、長政の海外雄飛と立身出世こそ記されても、女性の存在に記述が割かれることは少なく、植民地の隠喩として女性を表象するということも、当然ながら一般的ではなかった。こうした江戸時代の断片的ともいえる女性の記述と、恋物語として描く『山田長政暹羅偉蹟』(1887)までのあいだには、おおきなへだたりがあり、ここには欧化主義のなかで流入してきた植民地主義や異人種間ロマンスの間接的な影響を無視することができない。

たとえば長政と同じ 17 世紀の人物である英国人ジョン・スミスとアメリカ先住民ポカホンタスとの恋物語は、正木恒夫が明らかにするように、すでに明治の初期に広く知られていた(1996, p.36)。高等教育の教科書としてもっとも使用された書物の一つ『パーレーの万国史』(*Peter Parley's Universal History*, 1836)に、捕虜となったジョン・スミスを救おうとしてポカホンタスが身を投げ出すという場面が記されている。さらに正木は、その副産物として鎗田かねの「編輯」による『貞操英国美譚』(1886)を発掘している。その序文によれば、スミスを救ったポカホンタスが故あって別の英国人と結婚し、帰国したスミスと英国で涙の再会を果たすという物語に、鎗田は大いに感じ入ったという。そして苦心してポカホンタスに関する資料を集め、鎗田は翻訳とも翻案とも判別しがたい『貞操英国美譚』を刊行する。肝心のポカホンタスは序盤にのみ登場する脇役ではあるが、原作が判明していないため、それが鎗田の意図なのか、原作に従っただけの措置なのかどうかは不明である。ただ『貞操英国美譚』が、森の『山田長政暹羅偉蹟』の一年前に刊行されていることを考えれば、森の描く長政と柳真の悲恋もまた、ポカホンタス物語に感じ入るような心性と文脈のなかで生まれているということは可能だろう。

いいかえれば、長政の再評価と物語化の進展は、英国の植民地主義や帝国主義の物語の移入と切り離せないということでもある。そもそも日本の海外雄飛や膨張主義は、英国の思潮に多く影響を受けており、南進論も、それを日本の

地政学的な文脈で転用したところが多分にあった[2]。それは直接的には、たとえば前述のジェイムズ・ブルックに関する日本での紹介からうかがえる。ボルネオで王となったブルックは未婚であったため、1868年の死後は、親族のチャールズ・ブルックがそのサラワク王国の王位を継承した。英国は、サラワクを足がかりに植民地経営のための北ボルネオ会社を設立し(1882年に社長に就任したのが、初代駐日英国総領事であったオールコックである)、1888年にはサラワクを英国の保護領とした。王の信任を得て領土を与えられ、それがさらには保護領という形で英本国の実質的な植民地となるわけだが、このブルック一族は、日本ではしばしば英国版の山田長政として知られていたのであった。

いくつか例を挙げよう。1907年5月5日付けの読売新聞の社説「落後者の新天地」には「山田長政、クライブ、ヘスチング、ブルツク王の時代は已に去れりと云う勿れ」とあり、同紙ではさらに竹越与三郎(1907)が、「我邦の山田長政は已に古くなって居るが、今現に長政をやって居る」のがブルックだと記している。竹越が南進論者であることは決して偶然ではあるまい。同じく南洋の探検で知られ、漱石が『彼岸過迄』(1912)で揶揄するように言及した児玉音松(1908)も、朝日新聞での連載「最近南洋探検」で「快男子ブルツク」を紹介して、山田長政になぞらえている。この見立ては児玉とともに流布したらしく、雑誌『太陽』で河岡潮風(1908)が、「女皇の名を僭用したる怪傑ゼームス、ブルック」と題して児玉音松に言及しながら、ブルックのことを「西洋山田長政た

---

[2] 一例を挙げれば、徳富蘇峰の有名な『大日本膨脹論』(1894)は、題名からしてRobert Seeley, *Expansion of England*(1883)とCharles Dilke, *Greater Britain*(1870)を下敷きにしている。これら二つの本は、英国が世界に拡大してきた歴史と現状を顕彰し、その植民地との紐帯を強調するものだが、蘇峰はそれを単に日本にあてはめただけではない。同時期に蘇峰は、いわゆる白色人種は熱帯を植民地化できず、今後、衰退を迎えると予見したCharles Pearson, *National Life and Character*(1893)を、『白皙人種之前途』(1894)と題して深井英五に抄訳させている。つまり、衰退しつつある英国に代わって、日本が拡大してゆく気運にあると、英国の思潮を転用して展開したのだった。そしてこのシーリーにケンブリッジで師事し、師が主張する米露対立論をふまえて太平洋に注目したのが、後に初代タイ公使となる稲垣満次郎である。彼のタイから日本への仏骨奉迎(1900)は、この文脈でとらえなおされなければないだろう。なお、そのごく簡単なアウトラインは、橋本順光(2011)を参照。

る彼」(p.203)とも記している。

こうしたブルックと長政の連想は、その後も長い間、続くことになる。ブルックのサラワク王国は、1941 年 12 月、日本軍によって占領下に置かれるが、それからまもない翌 1942 年早々に、高根町五(1942)は「清七物知り帳」で、そんなサラワク王国の歴史を概説している。落語よろしく聞き手が清七老人の薀蓄に耳を傾けるという形式なのだが、老人からブルックの話を知った聞き手は、「ウマイことやったもんですね。山田長政よりウワテですね」と相づちを打つ(p.68)。正木恒夫は『植民地幻想』(1995)の第一章で『ビルマの竪琴』(1948)にふれて、食人種に食べられそうになった主人公の水島が「酋長」の娘に助けられる一場面に、ポカホンタス伝説の痕跡を指摘した。英国に端を発するコロニアル・ファンタジーが、ほとんどそれと気づかぬほどに、つまり、書き手の信条やいわんや良心とは無関係といえるまで血肉と化している好例にほかならぬというわけである。同様に、ブルックを言及する際に長政が言及され連想されるという「清七物知り帳」の一節は、それ以前の長政の物語がたとえブルックに直接言及していなくとも、無意識に同じ植民地主義を共有している一つの証左といっても差し支えあるまい。

4. 異人種間ロマンスとしての再編－角田喜久雄『山田長政』(1941)の成立とその影響－

たしかに植民地主義的な物語として共通しているとはいえ、異人種間ロマンスの扱いについては、ポカホンタス神話と長政物語の差異は無視できるものではない。帰途の島々で女性から慕われる英雄の物語とも要約できる『オデュッセイア』以来の海洋文学の伝統があり、シェイクスピアの『オセロ』といった古典的な作品も存在する英文学に比べるならば、日本文学は圧倒的に異人種間ロマンスが少ないといわざるを得ない[3]。たとえば南進論の長政物語とは対照的に、北進論とともに拡大し再編されていった源義経北行伝説（さらには大陸で

[3] この点については、橋本順光(2014b)を参照。

ジンギスカンになったという荒唐無稽な物語）においては、落ち延びた義経がアイヌや大陸の女性と恋に落ちるというポカホンタス的な主題は、江戸時代にはわずかに見られるものの、明治以降はほとんど描かれることがない。近代における義経物語で中心となるのは、義経を追う静御前とのすれちがいと別れなのである[4]。

実際、山田長政をめぐる物語でも、タイの王族とのロマンスは副筋でしかない。強調されるのは、遺志を受け継ぐ息子の存在である。英米の異人種間ロマンスでは、まずもって二人の間に子供が誕生せず、誕生しても悲劇の存在としてしか描かれないことと比べれば、これは日本の特徴とさえ呼べるものであろう。そもそも『海外異伝』には長政に子はなく養子に「阿因」と名付けたとしか書かれていない。諸説はかくも一致しないのだが、これがサトウ論文によって、阿因ことオインは長政とタイの王族との息子として、あたかも事実のように物語では描かれるようになったのである。

父が悪しき現地の政敵によって毒殺され、息子がその良き植民の理想を受け継ぐという主題は、当然ながら南進論を鼓舞する少年文学や少年向けの伝記に頻出する。ちょうど大仏次郎の『日本人オイン』(1932)という題名がいみじくも示唆するように、あたかも母からタイの文化を受け継いでいないかのごとく、それらの物語のなかで長政の息子は、あくまで日本の生粋の武士であることが強調される。これは英米の少年向け冒険文学において、たとえばキップリングの『キム』(1901)がその典型だが、植民地の文化に親近感を持ち、その言語にも詳しいハイブリッドな存在としての少年は登場しても、現地の女性を母とする主人公がほぼ皆無なのと対照的といえるだろう。英米とは逆に、ルーツはハイブリッドであっても、文化的なハイブリッドは忌避されているのである。こうした日本的ともいえる植民地主義は、長政の秘宝を探しだし、それをもとに日本とタイの間に大帝国を作ろうとする南洋一郎『日東の冒険王』(1937)において、もっとも露骨に現れる。理想郷の担い手は『日本人オイン』よろしく、

---

[4] 詳しくは橋本順光 (2014a)を参照。

もっぱら日本の子供がであって、そこにタイの人々はほとんど登場しない。こうした植民地主義は、南が池田宣政の名で子供向けに書いた『南進日本の先駆者山田長政』(1941)で、さらにはっきりと語られることになる。

このように「日本人」の子供に重点が置かれるという違いはあっても、長政物語が植民地主義的な異人種間ロマンスであることに変わりはない。むろん森貞次郎の『山田長政暹羅偉蹟』の段階ではまだ十分に展開されていないが、多分に英米の植民地主義の物語を直接間接に換骨奪胎する形で、それらの主題は次第に明確に描かれるようになっていく。その点で、ピエール・ロティの『お菊さん』(1887)が、森貞次郎の『山田長政暹羅偉蹟』と同年に刊行されていることは象徴的といえるだろう。これら日本人女性と欧米人男性の異人種間ロマンスを裏返したのが森鴎外の「舞姫」(1890)であるように、長政物語も、プッチーニのオペラ『蝶々夫人』(1904)や、ハリスとの悲恋を描いて話題となった十一谷義三郎の『唐人お吉』(1928)といった作品とけっして無縁ではありえない。たとえば中村吉蔵の『戯曲山田長政』(1932)は、『山田長政暹羅偉蹟』から姫の名前をそのまま拝借したのであろう、ソンタム王の娘ルーシンが登場し、猛々しくも雄々しい長政に恋心を抱く。そしてルーシンは長政が毒殺されるのを目にして、「シャムの女も、日本の女に劣けず貞操」(p.284)を心得ていると述べて自刃しようとするのだが、これは多分にハリスと別れて自死するお吉を、多分に意識したものではないか。むろん、スミスの助命を求めて自ら犠牲になろうとするポカホンタスの、遠い残響を聞き取ることも可能であろう。

これらの主題を巧みにとりこみ人気小説に仕立てあげたのが、1940 年 7 月から 12 月まで読売新聞に連載された角田喜久雄の『山田長政』(1941)である。角田の『山田長政』こそ、これまでの長政物語を集大成しつつ、国策に沿うよう異人種間ロマンスとして再編した点で、戦前の長政物の一つの完成形といってもよい。角田の小説ではソンタム王の妹ルタナ姫と長政との恋が描かれるが、これは 6 月に公開されて、主題曲である蘇州夜曲をふくめて大人気となった東宝映画『支那の夜』をかなり意識したものではないか。ピーター・B・ハーイ(1995)が詳しく分析したように、長谷川一夫演ずる日本人男性が、抗日的な中

国人女性（李香蘭）と恋に落ち、ついには結ばれる『支那の夜』こそは、欧米の異人種間ロマンスをもっとも巧みに日本化し、かつもっとも成功した物語にほかならない。『支那の夜』を製作した東宝は、1940 年 7 月 27 日付けの読売新聞によれば早くも連載中の段階で、角田の『山田長政』の映画化権を獲得し、「国策映画」として制作を企画したという。主演候補に長谷川一夫が挙がっていると発表していることからも、『支那の夜』の人気に便乗したものであることは明らかである。1941 年には、角田の作詞と菊池博の作曲で、ルタナ姫との悲恋を詠んだ「山田長政の唄」が発売されるが、これもおそらく『支那の夜』で劇中歌として使われた「蘇州夜曲」のヒットを念頭においてのことだろう。

そもそも山田長政は、角田の小説が書かれる前から、すでに 1936 年の段階で映画化の企画が報道されては立ち消えになっていた。1936 年 2 月 3 日付けの朝日新聞によれば、「駐日シャム公使ピラ・ミトラーカム・ラクシヤ氏」が映画化を主唱し、外務省外郭機関である国際映画協会が進めているとある。主役候補者が早川雪洲というのは、異人種間ロマンスを考える点で極めて示唆に富む。早川こそは、白人女性に横恋慕し、その身体に焼き印を押す日本人を演じた映画『チート』(1915)で話題になり、日本では国辱的と罵られた俳優だったからである（村上)。長政に早川雪洲を起用しようとしたのは、そんな話題性と宣伝を考慮してのことに間違いあるまい。そして同 1936 年の 2 月 9 日付けの読売新聞では、後に日泰文化会館館長となる外交官の柳澤健が、先のラクシヤ公使から聞いたとして、「作ってみたい映画」に山田長政を挙げている。同時期に「昭和 12(1937)年の日暹修好 50 周年記念事業の一つ」として山田長政の記念碑を設立とあるので、タイでの長政の顕彰もまた、こうした長政の映画化の機運と連動していたことがうかがえよう[5]。ただ映画はといえば、1939 年 4 月

---

[5] 天田六郎 (1948)によれば、記念碑には、1938 年 4 月に軍艦磐手と八雲が訪問した際に、「台湾阿里山桧」で鳥居が建立されたという。こういったタイでの長政顕彰に対して、タイの人々が冷ややかに眺め、あるいはたくましく利用しようとしていたことが想像できるが、その一端は、たとえば吉川英治の「水都アユチヤ游記」(1943)からもうかがえる。そこで吉川は、アユタヤ駅に到着するや「ヤマダ」と「ナガマサ」を連呼しながら、観光客に小伝や絵葉書、パンフレットを振り回す物売りの少年に囲まれたことを記してい

5 日付けの朝日新聞は、外務省とシャム国防相が共同企画として進行中と報道するも、その後、進展はなく製作されずに終わったと思しい。 先の角田喜久雄原作の映画化にしても、1940 年 9 月 8 日付けの読売新聞で、東宝のスタッフがアユタヤを調査し、タイの「シークルン撮影所」と打ち合わせと報じたまま、頓挫したようである。

このようにしてみるならば、戦後、大映が製作した『王者の剣　山田長政』(1959)は、1930 年代から実現しなかった企画が、時期を逸して実現した作品ということがわかる。主演は長谷川一夫で、脚本もまた『支那の夜』と同じ小国英雄である。原作は村松梢風となっているが、物語は実のところ、角田の『山田長政』をほぼそのままなぞっている。辻久一(1959)の撮影秘話を見ると、村松はタイに滞在して原作を執筆したというが、肝心の作品名には言及がなく、映画でも明らかにされていない。たしかに村松は山田長政についていくつかの短編を書いているが、それらの物語はどれも映画と対応しておらず、角田の『山田長政』を念頭においた形だけの原案依頼か、名義を貸しただけという可能性が多分にある。

映画が謳う日タイ合作にしても、内実はお粗末そのものである。合作した「アスヴィン・ピクチュア」を主宰する「バヌー・ユガラ殿下」は、「現皇帝陛下の従兄」で、オックスフォードに留学した芸術愛好家というが、具体的な共同作業はほとんどなかったと思われる。たしかにタイでの撮影場面は映画に使われているが、主要な配役はみな日本人であり、タイ側スタッフはあくまで現地協力だけだったのだろう。辻によると、船舶会社社員の「アンポン・ブラナシラピン」が協力し、タイ側の参考文献を「旧かなづかい」で村松に提出したというが、映画はほぼ従来の長政物語を踏襲しているゆえに、そのような新資料を生かした形跡は見当たらない。この「アンポン・ブラナシラピン」は戦争中に日本に留学し、陸軍小尉となったというが、こうした名ばかりの合作で日本の幻想が押しつけられているあたり、あるいは合作を謳いつつ、日本への協力を

る。むろん吉川はそれを不快そうに記すのだが、こういった少年たちがどのように長政の顕彰を眺めていたのかは、今後、発掘され対比される必要があるだろう。

巧みにあしらうあたり、戦前の日泰親善の内実を継承しているともいえるかもしれない。

ただ、このような時代錯誤に見える復古的な映画がこの時期に制作されたのは、故のないことではなかったことは注記しておかねばならない。なぜなら『王者の剣　山田長政』は、50年代のハリウッドが多く制作していた異人種間ロマンス映画の日本版とも考えられるからである。冷戦によってアジアの米軍基地の重要性が増した当時、駐屯する米軍兵士に現地への関心を高めつつ、アメリカと現地との友好関係を印象づける格好の手段として、アメリカでは異人種間ロマンスの映画が多く作られ、世界中で公開された(Klein)。そこでは旧来の植民地主義の物語が転用され、その多くはアメリカ人男性が、現地の女性を文明化する使者として振る舞う物語になっている。例えば日本を舞台にしたものでも『サヨナラ』(*Sayonara*, 1957)やハリスをジョン・ウェインがハリスを演じたお吉との物語にもとづく『黒船』(*The Barbarian and the Geisha*, 1958)などが公開されていた[6]。となると『王者の剣　山田長政』で、毒酒を飲んで死のうとする長政を見て、妻であるナリニー姫も同じ毒を飲んで後を追うのは、中村吉蔵の『戯曲山田長政』(1932)以来の定型表現の反復というだけでは片付けられないかもしれない。ひょっとすると映画『サヨナラ』で離ればなれになるのを厭った米兵と日本人女性（ナンシー梅木は、この演技で「東洋人」初のアカデミー賞を受賞する）が心中する場面をふまえてのことかもしれないからである。あるいはここでも、植民者の男性を前にして自己犠牲を厭わないポカホンタスの遠いこだまを聞き取ることができるかもしれない。

と同時に、こうした英国の物語との関連でいえば、先に言及したジェームズ・ブルックを題材にしたコンラッドの『ロード・ジム』(1900)に触れておく必要があるだろう。小説では、実際には結婚しなかったブルックとは異なり、「混血」のジュエルという女性と主人公のジムとのロマンスと結婚が盛り込まれている。興味深いのは、小説の最後だろう。ロードこと王という名の通り、ジムはサラ

---

6 タイを舞台にした『王様と私』(1956)もその一例である。これらについては、橋本順光(2014c)を参照。

ワクと思しき南洋国の暴虐な王を追い出し、対立する勢力を調停して王となるのだが、ジムをよく思わない賊たちの襲撃によって、住民の長の息子を死なせてしまう。そしてジムは、その長に殺される覚悟で村に向かい、撃たれて死ぬのである。ここには不合理ともいえる住民に対してあらがうことなく、運命を受け入れる点で、『王者の剣　山田長政』を思わせなくもない。この映画で長政は、献上された酒に毒が入っていることを承知の上で、もはや自分が必要とされなくなったのだと不可避の運命を認め、従容として受け入れるからである。

山田長政の物語は、まさにジェイムズ・ブルックが活躍した時期に日本版コロニアル・ファンタジーとして流布し、逆にブルックの生涯はしばしば長政になぞらえられた。ブルックの生涯に想を得たコンラッドの『ロード・ジム』にしても、1931年には谷崎精二による全訳が新潮社の世界文学全集に収録されており、多くの人の眼に触れるようになっていた。そのような文脈を考えるならば、山田長政を主人公にした最初の日本映画に、ブルックをモデルにした小説『ロード・ジム』との共通点があったとしてもなんら不思議ではないのかもしれない。ただし、それは影響というものではなく、両者が、それだけ同じコロニアル・ファンタジーを共有するようになった現れというべきものといえよう。

5. 結

これまでみてきたように、山田長政の物語は、英国の植民地主義とそのコロニアル・ファンタジーと不即不離の形で発展してきた。大鳥圭介の『暹羅紀行』により、江戸時代からの虚構に近い伝承が欧米のタイ研究と接続されることで、サトウの画期的な論文へとつながり、長政の物語が、いわばジェイムズ・ブルックの先駆けとして再発見され、再構築されていったと考えられる。むろん英国の植民地幻想を単に模倣したというわけではなく、日本の文脈や慣習に適応させる形で適宜、翻案されてきたことはいうまでもない。森貞次郎の『山田長政暹羅偉蹟』(1887)のように、ポカホンタス神話と連動するようにして長政とタイの王族とのロマンスの萌芽が生まれる一方、日本の植民地主義神話として息子の「日本人オイン」へ長政の遺志が継承されるという主題が盛んになって

いくのは、その現れである。そして異人種間ロマンスを洗練させた形でとりこみ、「国策映画」という形で利用しようとした角田喜久雄の『山田長政』(1941)が刊行される。しかし、それをようやく実現した『王者の剣　山田長政』(1959)は、アメリカが冷戦期オリエンタリズム映画を量産するなかでの便乗作品でしかなく、当然ながら、映画としても興業としても作品は失敗に終わることとなった。映画『王者の剣　山田長政』でナリニー姫を日本人が演じたことが示唆するように、異人種間ロマンスの要素は、以降の長政物語では稀釈され、忘れ去られていくことになるのである。換言すれば、そのように植民地主義的な色彩を脱色されたからこそ、長政は日タイ友好のシンボルとしていまだ言及されるような存在へと変化することができたといえるのかもしれない。

なお本稿は大阪大学・未来知創造プログラム「日タイ文化交流史の研究ー山田長政から柳澤健までー」および科研費・基盤（C）「世紀転換期の英国における黄禍論とその図像に関する比較文学的研究」（研究代表者橋本順光）の成果の一部である。

＜参考文献＞

天田六郎(1948)「バーンコークの日暹協会」『財団法人日本シャム協会会報』第48号

池田宣政(1941)『南進日本の先駆者山田長政』三省堂

石井米雄,吉川利治(1987)『日・タイ交流六〇〇年史』

大鳥圭介(1875)『暹羅紀行・暹羅紀略』工部省

大仏次郎(1932)『日本人オイン』講談社

河岡潮風(1908)「女皇の名を僭用したる怪傑ゼームス、ブルック」『太陽』14巻16号

宮内庁編(1969)『明治天皇紀』第3巻, 吉川弘文館

久保田裕子(2010)「近代日本における〈タイ〉イメージ表象の系譜：昭和10年代の〈南洋〉へのまなざし」、『立命館言語文化研究』21巻

合山林太郎(2014)「斉藤拙堂『海外異伝』における山田長政の形象」『日本研究論集』10号
児玉音松(1908)「最近南洋探検」第14回『朝日新聞』1908年12月5日
コンラッド、ハックスレイ(1931)『世界文学全集』第2期第6巻, 新潮社
タイ学会編(2009)『タイ事典』めこん
高根町五「清七物知り帳」第7回『国語運動』6巻2号
竹越与三郎(1907)「巧名禅」『読売新聞』1907年6月26日
辻久一(1959)「バンコック南四三二キロ」『世界の旅・日本の旅』1959年9月号
土屋了子(2003)「山田長政のイメージと日タイ関係」『アジア太平洋討究』5号
角田喜久雄(1941)『山田長政』大日本雄弁会講談社
中村吉蔵(1932)『戯曲山田長政』『日本国民』1932年9月号
ピーター・B・ハーイ(1995)『帝国の銀幕：十五年戦争と日本映画』名古屋大学出版会
橋本順光(2011)「近代日本におけるタイ旅行記研究のための覚書」橋本順光『日本・タイ相互交流の文学研究のために』大阪大学・チュラーロンコーン大学・国際ワークショップ報告・論文集
橋本順光(2014a)「境界を越える義経ジンギスカン伝説－大陸雄飛論から冒険小説まで－」『ライブ・イン・ボーダースタディーズ』13号
橋本順光(2014b)「繰り返されるパターン 11　国際結婚」『産経新聞』関西版2014年11月27日
橋本順光(2014c)「手塚治虫に見る映画『王様と私』の流用－「孔雀貝」と『火の鳥』－」『日本研究論集』10号
政尾藤吉(1905)　「暹羅の話」慶應義塾学報93巻
正木恒夫(1995)『植民地幻想：イギリス文学と非ヨーロッパ』みすず書房
正木恒夫(1996)「『ビルマの竪琴』とポカホンタス」『現代思想』1996年3月号
三木榮(1936)『山田長政』古今書院
南洋一郎(1937)『日東の冒険王』大日本雄辯會講談社

村上由見子(1993)『イエロー・フェイス：ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』 朝日新聞社

ナムティップ・メータセート(2010)「日本文学に見るタイ表象オリエンタリズムのまなざしから観光のまなざしへ」 『立命館言語文化研究』21巻

森貞次郎(1887)『山田長政暹羅偉蹟』春陽堂

山田長政顕彰会編(1974)『山田長政資料集成』山田長政顕彰会

吉川英治(1943)『南方紀行』全国書房

吉田千之輔(2008)「日タイ交流史の余白：大鳥圭介の『暹羅紀行』を読む」第1回、第2回、第3回『タイ国情報』42巻4号、5号、6号

Bowring, John (1857). *The Kingdom and People of Siam: With a Narrative of the Mission to That Country in 1855.* London: J.W. Parker and Son.

Chamberlain, Basil Hall (1891). *Thing Japanese.* London: Kegan Paul.

Conrad, Joseph (1900). *Lord Jim: A Tale.* London: William Blackwood.

Klein, Christina (2003). *Cold War Orientalism: Asia in the Middlebrow Imagination, 1945-1961.* Berkley: University of California Press.

Lanman, Charles (1886). *Japan : Its Leading Men : with an Historical Summary of the Empire.* Boston: D. Lothrop.

Parish, H. Carroll (1959). 'The Myth of Yamada Nagamasa and Its effect on Thai-Japanese Relations', *Journal of the Siam Society,* vol.48.

Satow, Ernest Mason (1885). 'Notes on the Intercourse between Japan and Siam in the Seventeenth-century', *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol.13, Part 2.

Templer John C. (ed.). (1853). *The Private Letters of Sir James Brooke, K.C.B. Rajah of Sarawak*, vol.2. London: R. Bentley.